3	ヅーフハルマ（長崎ハルマ）	
K070-3		Hendrik Doeff ほか編
ハルマの蘭仏辞典を原本とした蘭和辞典。オランダ商館長ヘンドリック・ヅーフが中心となって編集したことからこの名がついた。		

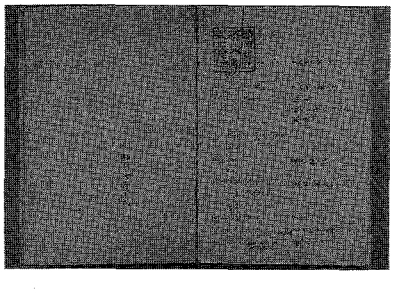
◆ オランダの商館長ヘンドリック・ヅーフ(Hendrik Doeff 1777－1835）が長崎通詞と協力して編集した蘭和辞典。ハルマの蘭仏辞典（第2版 1729）を原本としている。

ヅーフは、長崎通詞のオランダ語の能力の不足を嘆き、蘭和辞典の編集を思い立った。有能な通詞の協力を得て翻訳編集を開始したのが文化8年(1811）頃と考えられている。初稿の草稿は長崎奉行に献じられた。奉行はこのことを幕府に上申し、その結果、幕府はさらに検討することを命じた。通詞たちは、毎日のようにヅーフの許に通って仕事に励み、文化13年(1816）には一応の完成をみた。ヅーフも「緒言」を書いたが、全体の完成はヅーフ帰国後の天保4年(1833）であった。刊本ではなく写本が33部作られ、そのうち1部は幕府に献上され、2部は長崎奉行書と江戸天文方にそれぞれ分置された。　本書は、当時最大の蘭和辞典であり、しかも、今日でも十分に通用する実用性をもっている。収容語彙は約4万5千の単語と5万余の短句・短文からなる。翻訳法も日本語の意味を十分に示すために口語を採用し、長崎の方言も使った。この方法が厳密な例文と平易な訳文を生み出し、後の対訳辞書の模範となった。『ヅーフハルマ』が蘭学徒に重宝がられたのはいうまでもない。『福翁自伝』には、緒方洪庵の適塾（大坂）の書生たちが、オランダ語原書の解読の前夜に「ズーフ部屋という字引のある部屋に、五人も十人も群れをなして無言で字引を引きつつ勉強した」と語られている。

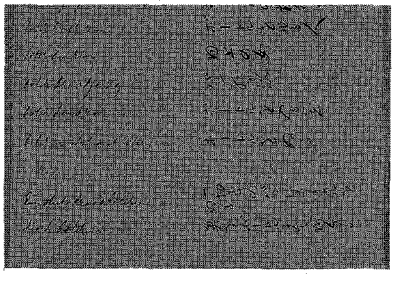
◆ 杉本つとむ氏によれば、『ヅーフハルマ』は成立の点から、その写本に大きく2種類の系統があるという。一つは文化13年頃の成立と考えられるもの、もう一つは天保4年の成立と考えられるものである。当館所蔵本（写本17冊）はそのどちらの系列にも属さない、草稿段階の原稿から筆写された写本ではないかと、氏は推定している（『江戸時代蘭語学の成立とその展開　Ⅲ』)。

形式は無罫紙に18行ずつ、左側にオランダ語の単語、右側に訳語が、いずれも墨書きされている。訳文は原則として漢字ひらがなまじりの表記であるが、ときにカタカナ表記も混在していて、統一されていない。訳文の筆跡の特徴から数人の手になるものと考えられる。また、蘭語は流れるような美しい筆記体で記されており、全巻とも同一人か、少なくとも同程度の力量を持った者によるものと想像される。原本の訳語が定まっていなかったのか、ところどころ訳語の部分に棒線だけが引かれている箇所がある。

＜参考文献＞　『江戸時代蘭語学の成立とその展開　Ⅲ』(849-2）当館所蔵本についての記述がある。



3　ヅーフハルマ



3　ヅーフハルマ